

『ベーオウルフ』における 手のイメージ

白井菜穂子

『ベーオウルフ』Beowulf のみに限らず、世界中の主な英雄伝、神話に登場する主人公には一般的に不思議な力が備わっている。特に彼らの神との結びつき、demigod としての性格からであろうか、伝承の中では主人公たちの超人的な肉体の力が賛美の対象となっている。ギリシア神話におけるヘラクレスはその最も代表的な例であるが、同じ様な半神半人を題材とした伝説は北欧にも多く見られる。アングロ・サクソン文学の中でも、詩の完成度、言語の特徴、古代ゲルマン文学とのつながりを研究する上で最高の材料と考えられる『ベーオウルフ』は主人公の並外れた腕力とそれによる英雄的行為が主題となっているところから、ギリシア・ローマ神話に代表される英雄伝承のジャンルと考えていいだろう。

本来、東西を問わず英雄伝承とは人間の神に近い能力を賛美するものであるが、神々が人間にとって非常に身近かな存在であった古典文学においては何の不思議もないが、キリスト教の到来以降のブリテン島では些か状況が違ってくる。聖コロンバがスコットランドのアイオナ島に修道院を建ててより、ケルト系修道僧たちは6世紀の初めにノーサンブリア王国にも達し、キリスト教の布教は急速に広まった。アイスランド・サガやエッダにも残存する古代ゲルマン英雄伝承は民族と共にブリテン島に渡っていたが、人の習慣と同様にその形をも変えた。キリスト教の影響を受けた口頭伝承は本来の英雄伝の特徴を保ちながらも次第に違った形の倫理観を備えていったのであろう。このような時代の背景を『ベーオウルフ』という作品は伝えてくれるのである。ギリシア・ローマ神話に通ずる英雄伝の形式、即ち主人公に超人的な力が備わっているという設定が人間の能力の無限さを楽しませてくれる一方、その力が敵を倒すために神によって与えられたものであること、そしてベーオウルフ自身に神を称える心がありその存在の前に謙虚であることがこの詩における

キリスト教の影響を示唆している。以上の点が古典の英雄詩と違う特徴であるが、現代の研究書によく見られるような、キリスト教的倫理観をもってして『ベオウルフ』を包括的に解釈してしまうことには一概には賛成出来ない。何故ならば、この詩は古代ゲルマン英雄伝にはなかった新しいキリスト教の神への信仰を勧めると同時に、昔ながらの慣習や戦における英雄的行為をも十分称賛していることが認められるからである。その割合からしても決して前者が大半を占めているわけではない。

神によって与えられた並外れた腕力は戦いにおいて窮地に追い込まれたベオウルフを幾度となく助けるが、注目に値すべきは、敵をその腕をもって絞め殺すという蛮行すら英雄的行為の一つとして描かれていることである。このように『ベオウルフ』には常識的なキリスト教の倫理観には決してあてはまらないヒロイズムがあるのであって、この詩が異文化の初めて接触した混沌とした時代を反映していることの証である。従って、『ベオウルフ』に描かれている世界を材料として分析すべきであって、キリスト教的概念をもってこの詩の問題点を総て解釈しようとすることは避けねばならない。

1

この論文は、主人公の超人的腕力の秘密、特に「手」と「力」の普遍的な関連性を分析することによって、英雄伝には欠かせない人間の能力への賛美という主題を『ベオウルフ』に求めることを目的とする。主人公の腕には30人力が備わっており、敵をその腕で絞め殺すこともできる。この点ではギリシア神話に登場するアキレスとの相似点があるが、不死身を誇りながら一箇所だけ弱点のあったアキレスに対して、ベオウルフにはこれといった弱点はない。死の直接の原因は、あまりの腕力の強さに剣の方が耐えられず折れてしまったためである。しかしこの事実には問題があり、折れた剣は古代ゲルマン伝承の中でも有名な名剣ネイリング Naeling でありながら、別の機会に使った名もない剣は折れることもなく役に立っている。¹ この謎を説明する一つの現象として、『ベオウルフ』の中では「手」は「力」の換喩語 metonym として使われていること、そして主人公にとってこの特殊な力は当時最も貴重な「剣」

にも勝る武器であることに注目すべきであろう。剣自体に超自然の力があるという設定はゲルマン系英雄伝にはよく出てくるが、主人公の腕力が名剣をも凌ぐという事実は『ベオウルフ』を他の英雄伝承とは異なったものに位置づける。² 以下に掲げる「手」と「力」の相関関係の分析は、この詩の中で「手」のモチーフが非常に重要であることの証明となるであろう。

2

『ベオウルフ』において「手」の持つ象徴的な意味やその役目を考察することは、普遍的な英雄崇拜の主題を語る上で大いに役立つに違いない。何故なら、ヒロイズムを研究するに当たっては、力の源がどこにあるか、人間の肉体自身かそれとも信仰にあるのかで、その性質は全く違ってしまふからである。大まかな言い方が許されるのであれば、古典においては人間自身に、中世文学すなわちキリスト教の影響下にある時代にはその信仰に力の源があると考えて良いであろう。ベオウルフの場合、同系列のゲルマン系文学にも共通して肉体の力のすばらしさが強調されている。しかしながら、その英雄的行動は常に神によって導かれ、主人公の信仰と倫理観に裏付けられている。至極当たり前のことではあるが、この詩は成立した時代背景を反映して、古典的英雄賛歌を主題としながらも英雄自身が神の秩序の下に定められた役目を果たしていることが明白である。

力の源が「手」にあるという設定は『ベオウルフ』に限らず他の北欧文学にも求められるが、「手」が「力」の metonym の役割を果たしているのはこの詩の特徴と言って良いだろう。本来アングロ・サクソンの韻文は、その metonym の多さで際立っている。代表的な例を一つ挙げると、『放浪者』*The Wanderer*の4行目にこの詩の主人公が、たった一人「自らの手で」水をかいて海を渡ったという描写がある。これは文字どおりの意味ではなく手で船を漕いだことを比喩的に表現したものである。それでは『ベオウルフ』の場合はどうかというと、英雄伝の特徴でもある表現として次のような例が有る。“The hand never checking its stroke” (p.41) や “The hand (of Eöfor) remembering the great

toll of bloody deeds, did not check its deadly stroke" (p.66) など
は明らかに「手」が剣に対して意志をもった行為者 agent の役割をも
っていることを示している。もちろん手による剣のコントロールが実
に当たり前の詩的表現と考えることも可能であるが、ベオウルフの
不思議な腕力がこの詩の主題であり時には剣を操り時には剣を折る
変則的な力であることを考え合わせると、「手」が力の metonym の働
きをするということにもっと深い意味を持つのではないだろうか。
つまり、ベオウルフにとっては剣よりも彼自身の腕力が最も信頼
のおける武器であり、彼の能力と意志の力が総て「腕」に凝縮され
ているとみていいだろう。以下に述べる各種の場面の分析は、この
仮定の裏付けになっていると思う。

まず最初にベオウルフがその腕力で敵を倒す場面を検討してみよう。
一つには主人公がグレンデル Grendel を退治するのに剣ではなく素
手を使っていること、そして主君ヒュゲラーク Hygelac の敵を腕
の中で押し潰して殺していることが挙げられる。この一見野蛮な力
はともすればグレンデルとその母の腕力に似たものがある。例え
ば、ベオウルフがグレンデルの母親との闘いでその手につかまれ
て湖の底に引き込まれた描写には、怪物の力の源がやはりその腕
に有ることが明らかである。

"One fell and murderous foe dragged me down to
the bottom of the sea, and the grim creature
held me fast in its grip. Yet my fortune
granted that I might plunge the point of my
battle-sword into the monster; the shock of
combat carried off that mighty sea-beast by my
hand." (p.17)³

グレンデルとその母は半人半獣であるにもかかわらず武器を使うことは
出来ない。そのかわり上述のとおり並外れた腕力を持ち、その力はベ
オウルフの腕力にも似た怪力である。古代ゲルマン伝承には、善悪の区
別なく怪物にも英雄にもその超人的な力を持つという点で共通項が有り、
英雄の時にして残忍な闘いぶりもむしろ称賛されていたと考えられる。
その例として次に挙げる一節は、よくベオウルフの残虐性を表す部分

として解釈される所であるが、この詩における「手」の役割が人間の力量や、肉体の力、個人の能力や何かを抑え支配する力を比喩的に表していることを考えると、主人公の残忍性ではなくむしろこの殺害の正当性が強調されていると言える。デイレイブン Dayraven の殺害の場面は、正当な復讐の手段としての「手」の役割を見せてくれる。何故ならば、デイレイブンはベーオウルフの主君であり親族であるヒゲラークの殺害者であるから。

ever since I slew Daeghrefn, the champion of the
Franks, with my own hand before the flower of
the host . . . Nor did the sword's edge slay
him, but my hostile grasp crushed the beating of
his heart and the framework of his bones. (p.66)

このような描写は古代ゲルマン伝承に類出する誇張表現であるが、人間の体を腕でもって押し潰すという手段は残酷と思われても仕方がないかもしれない。しかしながら“hostile grasp”に表されるように、古代ゲルマン人の中では主君の復讐は、特にそれが血族であった場合は最も英雄的行為とされていたのだから、ベーオウルフの怒りと残酷な殺害の描写はむしろ好まれたと考える方が妥当であろう。剣よりも素手で殺害することに、主君であった者を殺された怒りと肉親の血の絆の強さがよりはっきりと描かれているように思う。

同様にグレンデル殺害の場面でも、このような残酷な表現が使われている。しかしここでもベーオウルフには正当な殺害の理由が有り、また人々に害をなす怪物が無残な殺され方をすることは、やはり聞く者の耳に快いものだったのであろう。ベーオウルフはデーン人の国でグレンデルという怪物が出没し、人々を次々と食べては国民を苦しめているのを聞き、その国の王が父親の恩人であることもあって退治することを決めた。それゆえにこれは怪物退治のみならずデーン人の国王への恩返しでもあったのだから、復讐に次いで英雄には欠かせない条件であった。ベーオウルフとグレンデルの闘いは剣を使わず素手と素手の勝負であり、怪物の人間に対する暴虐はベーオウルフの怒りを呼ぶ。

Each would be foe to the other as long as he lived. The fearsome monster felt agony in his own body; on his shoulder a vast gash appeared, plain to see; the sinews were tearing apart, the muscles that bound the bones were splitting.

(p.23)

この場面では、グレンデルの片腕は体からもぎ取られ彼は急いで隠れ家に逃げ帰るのである。グレンデルにとっても腕の力は唯一の武器であったから、「手」が力と能力の象徴であるならば腕を無くすことは彼にとって致命的なはずである。それを裏付けるかのように腕を失ってグレンデルは死に至るのである。彼の「手」のグロテスクな描写は魔力の源を感じさせる。“The bed of each nail was just like steel from in front; each claw on the hand of that heathen warrior was a hideous spike.” (p.27) グレンデルの力は時々このように武器のような爪や指に込められているらしき表現がある。その魔物の動物のような爪はあたかも人間を引き裂くためにあるようだ。グレンデルの母親もまた鋭い爪によってベーオウルフを湖の底に引きずり込み、手の中で押し潰そうとするが巧みに造られた鎧が彼の命を助けるのである。

今までの説明からベーオウルフの並外れた腕力が怪物の力、グレンデルとその母に酷似していることが判るであろう。しかしながらベーオウルフの怪力は決して獣のごときものではなく、神の贈り物であることが詩の中に説明されている。残酷な殺害の描写は当時の人々には不愉快なことではなかったが、ベーオウルフの腕力が人々を救うために神から送られたことを記すことによって神の秩序の存在を訴え、布教の一端を成している。

The monster had tried to get to grips with him there; but the other bore in mind the strength of his might, that ample gift God had given him, and put his trust in the One Ruler for help, for comfort and support, and by these means overcame

the fiend, and laid low the creature from Hell.

(p.35)

この場面はベーオウルフとグレンデルが闘いを始めるところだが、注目すべきはベーオウルフが自分の力を信じることを神を信頼し慰めと援助を得られたゆえに魔物を倒すに至ったと書かれていることである。つまりベーオウルフの腕力は神に導かれた力と考えられ、彼の英雄的行為すなわち怪物退治は神の意志に沿うものと解せられる。同じ超人的怪力を持ちながらも、怪物と違って主人公にはその力が神の贈り物であり、それを使う正当性を持つ。むしろ武器ではなくこの腕力を持って敵を滅ぼすことこそ、この世界に神の秩序を取り戻す最適な手段であると考えられる。この点が『ベーオウルフ』においてキリスト教の布教のためには重要な設定なのである。

「手」の比喩的な意味を表す役割を探るに当たって、もうひとつ付け加えねばならない。英雄伝承では当然武器や武具の描写が多いのであるが、特にアングロ・サクソン文学の中では黄金で造られたゆえの美しさと価値に加え、武具に施された微細な波状模様の彫刻や、網状に編まれた細かい装飾が非常に賛美の対象となっている。決まり文句としては以下に記すように「手によって編まれた」という語句が頻出する。

His hand-woven war-corselet, broad and gleaming
with subtle work, would have to explore the
depths; it was so well able to protect his bone-
framed chest that no hostile grasp or malicious
clutch of any wrathful foe might harm the life
in his breast. (p.39)

ベーオウルフはグレンデルの母親との対決のときに、特に貴重な鎧を身につけていた。それは古代ゲルマン伝承の中で非常に有名な武具造りの名人ウェーランド Weland の作で、いかなる時も期待を裏切らず彼の命を敵の攻撃から守った。この一節の中でもウェーランドの鎧は手によって編まれていて細かい細工で光り輝いていることが記されている。その鎧の防御の力はおそらく伝説的な鍛冶屋の手によるものであり、細かく

編まれた鎖の装飾は外敵からの保護の意味があるのであろう。他にも同様の言葉使いが見られる。“interlinked mail-shirt” (p.41), “a mesh of rings interwoven for battle,” “an arm-ring twisted with skilful craft” (p.73)などは頻繁にある鎧の形容詞で、単に装飾のみを説明しているだけでなく「手」の作り出した保護の力をも表現しているであろう。おそらく古代ゲルマンの風習では鳶のように絡まった模様 interlaced pattern が身を守る力を持つと信じられていたのだろう。殆どの武器、武具にはこの模様が刻まれている。

3

以上の分析で、ベーオウルフの「手」には神から贈られた特別な力が宿り彼自身の能力と神の意志をまっとうする手段とされていることが明らかである。従って、ここで剣よりも素手で闘う意味をもっと深く考えてみたい。フィンレイ Finlay はベーオウルフが武器なしでグレンデルと闘ったことをアイスランド・サガの題材を用いて説明している。

Within the body of legendary history which was drawn upon by writers of the Icelandic sagas of Norwegian kings, there was a customary use of the motif of a king, when about to undertake battle, casting aside his coat of mail as gesture of defiance which testifies to his status as a warrior fit to lead other men. 4

しかしながらフィンレイの説明はグレンデルとの闘いのみに当てはまるもので、その母親や他の怪物達、竜との最後の闘いの場面などでは、ベーオウルフは迷わず剣を使い保護のために鎧を身につけている。武器を持たないことは確かに勇敢さを誇示するゲルマン的な手段だったかも知れないが、ベーオウルフにとっては必ずしも取るべき道ではなかった。なぜなら自分の身を守るために剣を使うことをベーオウルフは決して躊躇しなかったし、ウェーランドの鎧は常に身につけていたからである。従って以前にも述べたように、ベーオウルフが素手で闘うことを選んだ理由は相手が武器を使えないので公平な闘いを求めたためか、もしくは

彼の腕力が神の贈り物であるがゆえに怪物や敵によって失われた世界の秩序を取り戻す手段だったからと考えられる。次の一節はベーオウルフが自分の力を信じたときにこそ神の助けを得られた事実を描いている。

The wrathful champion cast aside the sword with
curving patterns, all bound round with fine
work, so that it lay upon the ground, tough and
steely edged; he put his trust in his strength
and the force of his hand-grip. Thus should a
man act when he means to win long-lasting renown
in the fray, and should never be concerned for
his life. (pp.41-42)

“剣を捨て、自身の力と手を信じるべきである”はベーオウルフが取るべき手段だったのである。“そうすれば永遠の名誉を得られる”というのはまさに「手」の持つイメージが神の栄光と祝福を表しているにからに違いない。役に立たなかった剣フルンティング Brunting の代わりに巨大な古い剣を見だしグレンデルの母親を殺害したのは、まさに彼が自分の手の力を信じたこの場面の直後である。

以上、「手」が「力」の metonym であり、人間の能力や肉体の力を表現するモチーフとして使われていることが説明されたと思う。ベーオウルフの場合、その不思議な怪力がゲルマン伝承にある bear-like warrior の特徴を留どめながらも、神に祝福されているために一層重要な役割を果たしている。アングロ・サクソン人にとっては貴重だった剣にも勝る武器であり、グレンデルや竜のような怪物たちに荒らされた世界に秩序を取り戻すために、神から与えられたものである。伝承に沿った英雄崇拜の形を取りながら、異教徒に対する布教を試みる手法としては見事なモチーフの使い方と言える。

注

¹ Ogilvy と Baker は、その著書の中でベオウルフの剣が時々役に立たないのは、アキレスのかかとと同じ弱点であると述べているが、常に彼の腕力によって剣がおれるのでなければ弱点とは言えないだろう。

² *Sexo Grammaticus* には、剣自体に超自然的力がある例が幾つか挙げられるが、ケルト系伝承であるアーサー王伝説のExcaliburもそのひとつであろう。

³ 現代語訳は総てGarmonswayの訳本による。

⁴ Alison Finlay, "The Warrior Christ and the Unarmed Hero," *Medieval English and Religious Literature*, edited by Kratzmann (Cambridge: Brewer, 1986), p.24.

参考文献

Bellows, Henry Adams, trans. *The Poetic Edda*. New York: The American Scandinavian Foundation, 1923.

Brown, Phyllis Rugg, Georgia Ronan Crampton and Fred C. Robinson, eds. *Modes of Interpretation in Old English Literature: Essays in Honour of Stanley B. Greenfield*. Toronto: University of Toronto Press, 1986.

Calder, Daniel G., Robert E. Bjork, Patrick K. Ford and Daniel F. Melia, trans. *Sources and Analogues of Old English Poetry II: The Major Germanic and Celtic Texts in Translation*. Cambridge: D. S. Brewer Ltd, 1983.

Chadwick, H. Munro. *The Heroic Age*. Cambridge: The University

Press, 1912.

Chambers, R. W. Ed. C. L. Wrenn. *Beowulf*. 3rd ed.
Cambridge: The University Press, 1959.

Davidson, H. R. Ellis. *The Sword in Anglo-Saxon England: Its
Archaeology and Literature*. Oxford: The Clarendon Press,
1962.

De Vries, Jan. Trans. B. J. Timmer. *Heroic Song and Heroic Legend*.
London: Oxford University Press, 1963.

Dunning, T. P. and A. J. Bliss, eds. *The Wanderer*.
London: Methuen, 1978.

Finlay, Alison. "The Warrior Christ and the Unarmed
Hero." In *Medieval English Religious and Ethical Literature:
Essays in Honour of G. H. Russell*.
Ed. Gregory Kratzmann and James Simpson. Cambridge:
D. S. Brewer, 1986, pp.19-29.

Fisher, Peter, trans. Ed. Hilda Ellis Davidson. *Saxo Grammaticus:
The History of the Danes*.
2 vols. Cambridge: D. S. Brewer, 1979.

Garmonsway, G. N. and Jacqueline Simpson. *Beowulf and Analogues*.
London: J. M. Dent and Sons Ltd, 1980.

Goldsmith, Margaret E. "The Christian Theme of *Beowulf* "
Medium AEvum. 29 (1960), 81-101.

Köberl, Johann. "The Magic Sword in *Beowulf*" *Neophilologus*,
71, No.1 (1987), 120-128.

Kroll, Norma. " *Beowulf* : The Hero as Keeper of Human
Polity." *Modern Philology* 84 (1986-87), 117-129.

Morris, William, trans. *Volsunga Saga : The Story of the Volusungs
and Niblungs.* London: The Walter Scott Publishing,
n.d.

Ogilvy, J. D. A. and Donald C. Baker. *Reading "Beowulf: An
Introduction to the Poem, Its Background, and Its Style.*
Norman: University of Oklahoma Press, 1983.

Wallace-Hadrill, J. M. *Early Germanic Kingship in England and on the
Continent.* Oxford: The Clarendon Press, 1980.

Young, Jean I., trans. *The Prose Edda of Snorri Sturluson: Tales
from Norse Mythology.* Berkeley: University of California
Press, 1954.